

第4回「友達との約束～社会性の芽生え～」

午後の自由時間、施設の談話室では利用者さんたちがそれぞれ好きなことをして過ごしています。読書をする人、テレビを見る人、パズルに取り組む人。その中で、いつも一人で窓際の椅子に座り、外の景色をぼんやりと眺めているのが、まさおさん（仮名・26歳男性）でした。

まさおさんは軽度の知的障害と自閉症スペクトラムの特性があり、人との関わりを持つことが苦手でした。施設を利用し始めて2年になりますが、他の利用者さんとの交流は最小限で、職員との会話も必要最低限にとどまっていた。グループ活動の時間も、参加はするものの周りとは距離を置き、一人で過ごすことを好んでいるように見えました。

ところが、ある日のこと。談話室で一人過ごしていたまさおさんの近くに、ゆうこさん（仮名・24歳女性）が座りました。ゆうこさんも軽度の知的障害がありますが、明るく社交的な性格で、誰とでも友達になりたがる優しい女性です。

「まさおくん、いつもここに座ってるのね。外、きれいだね」ゆうこさんがまさおさんに話しかけました。まさおさんは最初、少し困ったような表情を見せましたが、ゆうこさんの人懐っこい笑顔に、小さくうなずいて返しました。

それから数日間、ゆうこさんは毎日のようにまさおさんの隣に座り、話しかけ続けました。「今日は雲がきれいね」「あそこに鳥がいるよ」「お昼ごはん、おいしかったね」。まさおさんは相変わらず言葉少なでしたが、時折小さく相づちを打ったり、ゆうこさんが指さす方向を一緒に見たりするようになりました。

担当の鈴木職員は、この二人の変化を温かく見守っていました。「まさおさんにとって、ゆうこさんの存在が心の支えになっているようです」と他の職員とも情報を共有し、無理に距離を縮めさせようとせず、自然な流れを大切にしました。

ある雨の日のこと、いつものように窓際に座っていたまさおさんのところに、ゆうこさんがやってきました。「まさおくん、今日は雨で外に出られないね。でも明日晴れたら、一緒にお散歩しない？」ゆうこさんが初めて具体的な提案をしました。

まさおさんは少し考えてから、「うん」と小さく答えました。その時のまさおさんの表情には、これまで見たことのない穏やかさがありました。ゆうこさんは飛び跳ねるように喜び、「やったー！約束だよ！」と嬉しそうに言いました。

翌日は見事に晴れました。午後の散歩の時間、まさおさんは珍しく自分からゆうこさんのところに行き、「散歩、行く？」と声をかけました。ゆうこさんは「約束覚えてくれたのね！」と大喜びでした。

二人は職員に付き添われながら、施設周辺の遊歩道を歩きました。まさおさんは普

段よりもリラックスした様子で、ゆうこさんが見つけた花や虫の話に耳を傾けていました。「あ、ちょうちょ！」とゆうこさんが指さすと、まさおさんも「きれい」と短く答えました。

散歩から戻ると、二人は自然と隣同士に座るようになりました。ゆうこさんが「楽しかったね。また明日も一緒に散歩しようか？」と提案すると、まさおさんは迷わず「うん」と答えました。

それから二人の友情は日に日に深まっていきました。散歩だけでなく、作業活動の時間も隣同士で取り組むようになり、昼食の時も一緒にテーブルに座るようになりました。まさおさんの表情は以前よりもずっと明るくなり、時には声を出して笑う姿も見られるようになりました。

ある日、ゆうこさんが風邪で施設をお休みした時のことです。まさおさんは一日中そわそわと落ち着かない様子でした。職員が「ゆうこさんは風邪でお休みです」と説明すると、「大丈夫？」と心配そうに尋ねました。翌日ゆうこさんが元気に登所すると、まさおさんは駆け寄って「心配した」と伝えました。

ご家族からも変化について嬉しい報告がありました。まさおさんのお母さんは「家でゆうこちゃんの話をするんです。『友達』という言葉は初めて聞きました」と涙ぐんでいました。ゆうこさんのお父さんも「娘がまさおくんのことを大切に思っているのがよく分かります。お互いにとって良い関係ですね」と喜んでいました。

二人の関係は、施設内の他の利用者さんたちにも良い影響を与えました。「僕も一緒に散歩したい」と言う人が現れたり、グループ活動により積極的に参加する人が増えてたりしました。

まさおさんとゆうこさんの友情は、人と人とのつながりの大切さを私たちに教えてくれました。障害があっても、一人ひとりが友情を育み、お互いを大切に思う気持ちを持っていること。そして、そうした関係性が生活の質を大きく向上させることを、二人が証明してくれています。

今日も二人は約束通り、一緒に散歩に出かけています。その姿を見ていると、友達がいることの素晴らしさを改めて感じずにはいられません。